様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７９２４８４

研究課題名（和文）シーソーモデルを活用した父親の育児行動を促進するための父親学級プログラムの開発

研究課題名（英文）an educational program to promote first-time father's participation in childcare and household chores

研究代表者
山口　咲奈枝（YAMAGUCHI, Sanae）

山形大学・医学部・講師

研究者番号：２０４３１６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、父親の育児行動を促進するために、父親が育児や家事をする意義の解説と父親のニーズを取り入れた育児知識の提供、育児技術の演習を組み合わせた指導プログラムを開発した。本研究で開発したプログラムに参加することで、父親の家事時間は有意に増加した。また、父親の家事役割の受容と育児能力の自信が有意に上昇した。これらのことから、本研究で開発したプログラムは、父親の家事行動を促進させることに有用であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an educational program to promote fathers' participation in childcare and household chores. The amount of time spent on household chores significantly increased in the intervention group. In addition, acceptance of the father's role in household chores and confidence in their childcare ability significantly increased in the intervention group. These results indicate the efficacy of this educational program to promote first-time fathers' participation in household chores.

研究分野：医歯薬学

キーワード：父親　育児　家事　プログラム

１．研究開始当初の背景

（１）父親の育児行動を促進するための父親学級プログラム開発の必要性

父親の育児行動を促進するために、厚生労働省はイクメンプロジェクトを立ち上げ、父親学級の開催を推奨している。また、内閣府は、2017 年度に父親の育児家事時間を１日あたり 2 時間 30 分にすることを目標としている。しかし、現状では目標値の３分の１にも達していない。研究者がこれまでに実施した調査では、父親学級の約 80%は、安全、安楽に妊娠期間を過ごし、出産することに焦点があてられており、父親の育児行動を促進することを目的としたプログラムは実施されていない実態が明らかとなった。したがって、父親の育児行動を促進するためには、新たにプログラムを開発することが必要であると考えた。

（２）父親の育児行動を促す概念枠組み

父親の育児行動を促す動機には、男女平等の性役割観をもっていることや父親役割を受容し、育児行動を行う意義を理解していることがあげられる（Gagnon2009）。一方、育児行動を妨げる要因としては、育児への関心の低さや、育児知識の不足と育児技術の未熟性により、育児能力に対する自信をもてないことで生じる心理的負担があげられる（Goodman 2005）。これらのことから、育児に伴う心理的負担が強い父親は、育児行動を実行することができないと考えられる。したがって、育児行動を促すためには、行動変容の動機付けが必要であると考えた。宗像は、行動の実行に関連する「動機」と「負担」という要素をシーソーにたとえ、動機を強化し、負担を軽減することで行動が実行されるという行動変容のメカニズムを解明した。この概念をモデル化したのがシーソーモデルである。本研究では「育児をする意義を理解するという動機付けを強化し、育児に対する自信がないという負担を軽減することで父親の育児行動は促される」という仮説を立てた。そこで、本研究で開発する父親学級プログラムは、育児行動を促す動機を強化し、負担を軽減することを枠組みとした。

２．研究の目的

本研究では、父親の育児行動を促進するための父親学級プログラムを開発し、その有効性を検証することを目的とした。

３．研究の方法

（１）父親の育児行動を促進するプログラムの作成

平成 24 年度は父親の育児行動を促進するための父親学級プログラムを作成することを目的として研究を実施した。Chinman ら（2010）のプログラム開発の手順に則り、研究者が育児に関する父親のニーズや父親学級の実態を踏まえてプログラム案を作成した。次に、産科拠点病院における産前学級および行政機関の両親学級に携わる助産師や保健師および母子看護学の教員に研究協力を依頼し、父親学級プログラム案について検討を重ねた。その結果、プログラムは「父親が育児をする意義」、「育児知識の提供」、「育児技術の演習」の３つを骨子とする、講義と演習を交えた内容に決定した。

（２）作成したプログラムを実施するパイロットスタディ（介入プロトコールの確立）

平成 25 年度は、前年度に作成した父親学級プログラムを活用し、介入プロトコールを確立するために、パイロットスタディを行った。具体的には、産科拠点病院に研究協力を依頼し、初めて子どもをもつ父親を対象として、ランダム化比較試験を行った。既存の指導プログラムは産前に実施されることが多いが、どの時期にプログラムを実施することが父親の育児行動の促進に効果的であるかは先行研究で検証されていなかった。そこでパイロットスタディは、本研究で作成したプログラムを産前に実施する産前介入群と産後（母子の入院中）に実施する産後介入群、対照群の 3 群に無作為に割り付け、父親の育児時間と家事時間を比較した。その結果、退院１か月後の時点で 3 群間の平日の家事時間に有意傾向がみられ、産後介入群の家事時間が多かったことや、産後介入群の育児・家事時間が退院１週間後よりも１か月後で有意に増加していたことから、産後に本研究プログラムを実施することで、父親の育児行動が促進されることが示唆された。このパイロットスタディによって、介入時期、サンプルサイズ、評価指標等を決定し、介入プロトコールを確立した。

（３）父親の育児行動を促進するプログラムの効果の検証

平成 26・27 年度は、前年度に確立した介入プロトコールを基に、本研究で開発したプログラムを実施する介入研究を行った。

４．研究成果

（１）本研究で開発した父親の育児行動を促進するプログラム（表１）

本研究で開発した父親の育児行動を促進するプログラムの構成は、オリエンテーション5分、父親が育児や家事をする意義の解説10分、育児に関する知識の提供15分、育児技術の演習30分である。

本研究独自の内容は、父親が育児や家事を

する意義の解説や授乳表を用いた授乳間隔の説明、母親が望む具体的な支援を示したことである。

表 1. 父親の育児行動を促進するプログラム

テーマ	概要	時間
父親が育児や家事をする意義	・母親の育児や家事の負担感の軽減 ・子どもの発達の促進 ・父親としての発達促進	10 分
育児知識	・授乳間隔 ・母親が望む支援 ・子どもの啼泣 ・母親の育児不安	15 分
育児技術	・衣服の着脱 ・おむつ交換 ・沐浴	30 分

（2）開発したプログラムの効果

介入群と対照群の産前、退院 1 週間後、退院 1 か月後の平日の家事時間の経時変化を比較するために二要因反復測定分散分析を行った（図 1）。その結果、介入群と対照群における平日の家事時間の変化のパターンに有意傾向があった（$p<.10$）。二要因反復測定分散分析で有意傾向がみられたため、被験者内因子の多重比較を行った。その結果、介入群の家事時間は、産前が 36.3±29.0 分であったのが、退院 1 か月後には 55.0±21.1 分となり、有意に増加していた（$p<.05$）。一方、対照群では、産前の家事時間が 24.6±22.0 分で、退院 1 週間後に 41.3±33.2 分と増加するが、退院 1 か月後では 30.0±21.7 分に減少しており、有意な変化はなかった。一方、介入群と対照群における平日の育児時間の変化のパターンには有意差がなかった（図 2）。退院 1 週間後の平日の育児時間は、介入群が 77.5±39.5 分、対照群が 85.0±70.5 分で、退院 1 か月後には介入群 107.5±51.5 分、対照群 112.5±81.2 分となっており、介入群、対照群ともに退院 1 週間後よりも退院 1 か月後の時間数が増加していた。

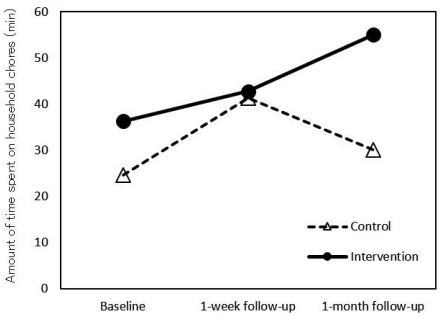

図 1．父親の家事時間の比較

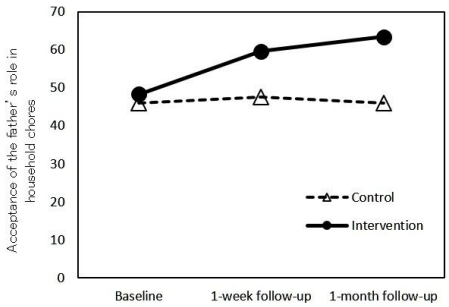

図 2．父親の育児時間の比較

家事役割の受容について、介入群と対照群の経時変化のパターンに有意差があり（$p<.05$）、介入群では、産前が 48.3 点であったのが退院 1 週間後には 59.6 点に有意に上昇し（$p<.05$）、さらに、退院 1 か月後には 63.4 点に有意に上昇していた（$p<.01$）（図 3）。育児能力の自信は、2 群における経時変化のパターンに有意傾向があり（$p<.10$）、介入群では、産前が 49.0 点であったのが退院 1 か月後には 62.0 点に有意に上昇していた（$p<.05$）（図 4）。

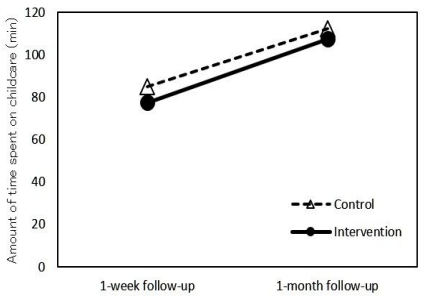

図 3．父親の家事役割の受容

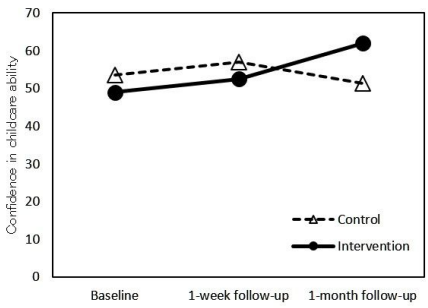

図 4．父親の育児に対する自信

（３）研究成果の国内外における位置づけ

内閣府は、父親の育児・家事行動の数値目標として、2017 年に 6 歳未満の子どもをもつ父親の育児・家事時間を 1 日あたり 2 時間 30 分にすることを掲げている。この数値は 10 年間で少子化を克服したフランスの父親の育児・家事時間を水準として設定された。アメリカ、イギリス、スウェーデンなど欧米諸国の父親の 1 日あたりの育児・家事時間は、いずれも日本が掲げる数値目標を上回っている。しかし、日本では、6 歳未満の子どもをもつ父親の育児・家事時間は、最新の報告でも平均 1 時間 6 分であり、欧米諸国の父親と比べると日本の父親の育児・家事時間は短いことがわかる。日本では欧米諸国よりも育児や家事の負担は母親に集中しているといえる。したがって、父親の育児や家事行動を促進することは、日本において社会問題となっている母親の育児負担や育児による就職困難を解決する方法のひとつとして重要である。

日本における 0 歳未満の子どもをもつ男性の家事時間の平均は 29 分であり、これと比べて本研究の介入群の退院 1 か月後の家事時間数は多かった。また、育児時間と家事時間を合計した育児・家事時間については、介入群の退院 1 か月後の平日の育児・家事時間は 2 時間 42 分であり、内閣府が掲げている父親の育児・家事時間の目標値である 2 時間 30 分を超えていた。このように、本研究の指導プログラムに参加することが、父親の育児・家事時間の増加につながったことは、父親の育児・家事行動を促す支援として意義があると示すことができたと考える。

（４）今後の展望

本研究では、父親の育児時間については、介入群と対照群との間で有意差がなかった。本研究の対象は、両群ともに産前の時点で、育児役割の受容が高く、そのことが育児行動に繋がったため、介入による効果が得られなかったと考える。また、本研究で開発したプログラムは、知識の提供と育児手技の演習が中心であり、個々の父親の育児に対するイメージや、父親役割をどのように認識しているのかという育児に対する意識への働きかけが不足していた。森田らは、父親役割行動の獲得には、父親役割モデルの想起、わが子の育児の想像、周囲が求める父親役割の認識が関連していることを示唆している。このことから、父親の育児行動を促すためには、育児を自分自身のこととして認識し、育児意識を高めるプログラムが必要であると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Sanae Yamaguchi, Yukiko Sato: The effects of an educational program to promote first-time fathers ' participation in childcare and household chores. International Journal of Nursing & Clinical Practices. 査読有. 2016. 3: 166；2-6 Doi 10.15344/2394-4978/2016/166

② 山口咲奈枝, 佐藤幸子：育児行動の促進を目的とした父親学級プログラムの介入時期別にみた効果の検討. 母性衛生. 査読有. 2014；54（4）：504-511

③ 山口咲奈枝：母親の家事・育児負担を軽減する「父親学級プログラム」. 妊産婦と赤ちゃんケア. 査読有. 2013；5(3)：89-93

〔学会発表〕（計 5 件）

① 山口咲奈枝, 佐藤幸子, 佐藤志保：生後 1 か月までの父親の育児･家事行動を促進する指導プログラムの有効性の検証. 第 40 回日本看護研究学会, 奈良県文化会館（奈良県奈良市）；2014 年 8 月

② Sanae Yamaguchi, Yukiko Sato, Shiho Sato：Factors that influence the amount of time spent on child care and housework by fathers until 1 month after child birth. 25th International Nursing Research Congress , Hong Kong(China)；2014, July

③ Sanae Yamaguchi, Yukiko Sato, Shiho Sato：Evaluation of the status of a program for fathers that aimed at promoting child care and housework. 35th International Association for Human Caring Conference, Kyoto International Conference Center(Kyoto city Kyoto)；2014, May

④ 山口咲奈枝, 佐藤幸子：育児・家事行動の促進を目的とする父親学級に参加した父親で育児･家事時間に変化がみられた事例の特徴. 第 54 回日本母性衛生学会, 大宮ソニックシティ（埼玉県大宮市）；2013 年 10 月

⑤ 山口咲奈枝, 佐藤幸子, 藤田愛, 宇野日菜子, 佐藤志保：育児行動を促進することを目的とした父親学級プログラムに参加した父親の満足度. 第 39 回日本看

護研究学会，秋田県民会館（秋田県秋田市）；2013 年 8 月

〔その他〕
特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
山口　咲奈枝（YAMAGUCHI，Sanae）
山形大学・医学部・講師
研究者番号：２０４３１６３７